

先週の水曜日まで、私は沖縄・そして石垣島にいました。この2つの島にもこのような集会があって、随分大勢の方々がお話を聞きに来てくださいました。

終わった後、色々挨拶に来られたうちの1人の方が「又吉です。」「あ、芥川賞の」「はい。親戚です。」「えっ！」冗談かなと思って。というのは、又吉直樹（またよし なおき/1980-）さんは寝屋川（ねやがわ）出身のはず。北陽高校でしょ。ずっとサッカーやってたんじゃないですか？で、東京の吉本の学校に行った。「大阪じゃないですか？」彼は大阪生まれだけど、お父さん・お母さん・おじいさんたちは元々沖縄の方。沖縄には又吉という苗字は珍しくない。

おじいさんは沖縄からハワイに出て、ハワイでクリスチャンになったみたいですね。

さとうきび畑で重労働している人たちを訪ね歩きながら聖書の話をして、一本筋の通った、背筋がシャンと伸びたクリスチャンだったそうです。又吉直樹さんのご両親もクリスチャンだと言うのです。直樹さんも日曜学校に行っていたと。

お母さんはクリスチャンですが、お父さんは偽クリスチャンだそうです。なぜ分かるかということ、お母さんに惚れ込んで「結婚して欲しい！」「私、クリスチャンでないと結婚しない！」

それでクリスチャンになったからニセモンや。きっかけは何であったとしても、本当に信じていたらいいじゃないか。だけど、本気で信じているとは思えないと。

クリスチャンは食事の前にお祈りします。その時は「キョロキョロしないで、目をつむって、心合わせなさい」と言われる。でも「目をつむっていなさい」と言われれば、開けたくなるのが人間の常ですよ。祈っている時パッと目を開けたら、お父さんも目を開けてる。そして、祈りの真っ最中に、お父さんが変顔して笑かして。クリスチャンは、いくら何でも、これはしませんわ。ここの集会にも、笑いが大好きなクリスチャンはたくさんいるけど、神に祈っている時に変顔して爆笑取ってやろうなんて、それはちょっとないと思う。でも、彼も幼い時に聖書の話聞いていたのかと思うと、何となく嬉しい感じがしますね。

彼はお笑い芸人であるだけではなく、作家として色んな作品を書くようになりましたが、文章を書くのに目覚めたのは小学5年生の時だそうです。『遠足』という題で作文を書きました。

遠足に行った時、教頭先生と自分の2人だけで集団から離れた所を歩いていて、ちょっと傾斜がきつかったのでしょう。又吉少年が足を滑らしてバランスを崩し、「あっ！」と枝をつかんだらパキッと折れてしまったんです。そしたら教頭が「木かて生きてるんや。折ったらあかん」と叱り飛ばした。

「先生、ごめんなさい」言うてね。

しばらく行くと、もっと傾斜が急になって、教頭が「あー！」と1番下まで駆け抜けて行くのですが、途中10本くらいバキバキバキ！そして、必死によじ登って来た。又吉少年は、気を遣って何も言いませんでした。そしたら、教頭の方から「木はな、先生を守ってくれたんや。」随分積極的な解釈しとるなど。生徒が1本折ったら叱り飛ばして、自分が10本くらい折っても「木が先生を助けてくれたんや。」

「なんて勝手な」という事で、それを書いた作文を読んだ時、大爆笑になった。大いに盛り上がった。それが文章を書く始まり。なぜ爆笑になったかということ、やっぱり共感したからだと思うんですよ。

私たちの人生にもそういう事ないですか？自分がやった過ちは、どちらかということ小さめに勘定して、

他人がやらかした事は、実際よりも大きく悪い事みたいに。罪や失敗を量る目盛りがパンツのゴムのように伸び縮みして、自分の時は短めに考えて、他人の時はガーッと伸ばしてしまうようなね。

罪という事が中々ピンと来ない理由の1つは、「私」が罪のスタンダードになっているからです。何が善で何が悪かというのは私の良心が決める。

でも、私の良心はいつも普遍的なものではなく、誰がやったかによって、長さが変わってしまうんですね。

聖書は「自己中心である限り罪が分からない。」自己中心でなく神中心。

「聖なる神様の前に立った時、私はどうだろうか？」というのが聖書の基準です。

聖なる神様の前に立って、「神に調べられても大丈夫」と言える人は誰もいません。

聖なる神様の前に立って、しかも完全な平安を得る事ができる罪の赦しを聖書は提供しているのです。

今日は特に「心騒ぐ者たちへのことば」という事で、その部分を考えたいと思います。

イエス・キリストが十字架にかかる前日に、弟子たちに語られた言葉です。

ヨハネ 14:1 あなたがたは心を騒がせてはなりません。神を信じ、またわたしを信じなさい。

「心騒ぐ」とは不安でいっぱい・心配事で心が占領されている・思い煩いで内側が窒息しそう、というような状態。深い悩み事・心配事・思い出す度にしょんぼりしてしまうような事がずっと心の中に渦巻いていたら、多分美味しいものを食べても味がしない。そもそも食欲が沸かない。

美しい音楽を聞いても、誰かに話しかけられても上の空で、言葉が心に入って来ない。

美しい景色を見ても感動できないと思います。

だから、心を騒がせない方がいい。心を騒がせてはなりません。どういう時に心騒がせるのか？

心騒ぐ理由 1. 自分がしでかした失敗の責任を自分で取らなければならない。にも拘わらず、それを払い切る事ができない。いわゆる自分の罪と向き合う時、「どうしたらいいか?!」と思いつむのではないか。

随分昔ですが、私はお茶に凝った時期がありました。全国にクリスチャンの友人がいて、関東のクリスチャンが、「ツバキさんというクリスチャンの陶芸家がいる、すごくいい作品作るよ。その人に、あなたのための特別な湯呑みをハンドメイドで作ってもらうから、発注してもいい？」

「いや、せんといってください。なんぼかかるか分かん。」「いや、プレゼントだよ。」「発注してください！」

ツバキさんが「使う方はどんな方ですか？どんな仕事の人ですか？どんな人柄ですか？」と、その人の事を聞いて、イメージに合うように「この人には、この山のこの粘土を取ろう。」

採取する粘土の種類から考えてくれる。出来上がるまで半年かかるんです。まず粘土を取って来て、それを濾して、成形して、色付けして、窯入れして、窯出しして、半年後に桐の箱で送られて来た。

「さあ、飲むぞ！」と思ったら紙が入っていて「すぐに飲まないでください。まず、米のとぎ汁で煮沸してから使ってください。」「面倒くさいなあ。でも、高価な物や」と、それをやりました。

橙色というか茶色というか、グラデーションになっていて、実に高級な。高級そうじゃない、高級な。私のお気に入り、大の大切な物になりました。

当時というか、今もですが、私には子供が3人いて兄兄妹／男男女。ウチの子供たち、めちゃくちゃ仲がいいんですよ。お前ら、どうなってんねんと。自分の幼い時の兄弟関係を考えると考えられへん。

「なんで、そんなに仲良しやねん？」3人のうち誰か1人が親に怒られると、クリスチャンの家だから、残り2人が祈り会する。「イエスさま、早く怒りが収まりますように。赦してやってください。」

ある時、取材で準備をしていました。その日も3人ではしゃいで遊んでいたんですが、突然はしゃぎ声
がピタッと止まったかと思うと、「割〜りよった、割りよった。」「えっ!割った?まさか?!」
「割〜りよった、割りよった。お父さん、怒るで!」
「うえっ!」と、死ぬような気持ちになって部屋に入ると、大事なあの湯呑みが無残にも粉々。
そばに末っ子の娘が、5歳くらいでしたが、もうね、しゅんとうつむいて。
「ナニやってくれてんねん、お前は!」と思ったけど、「言う事あるやろ。」「お父さん、ごめんなさい。」

“ごめんなさいと悔い改めたら赦す”というのが我が家のルールです。

「子よ、あなたの罪は赦された」(マルコ 2:5)。1度言ってみたかったけど。キリストだけが言える言葉で
すが。「子よ、しっかりしなさい」(マタイ 9:2)みたいなね。「よし。分かった。次から気いつけろよ」
と言ったものの、腹の中が収まらへん。ブツブツ言うてたら、「大体、あなたが床に置きっぱなしにする
からや。」台所から声が聞こえて来て、それでまた怒りが…。

ま、終わった事は仕方がない。形ある物は壊れる。崩れる。これは一休さんも言っている事ですよ。
エントロピーの法則には、誰も逆らう事はできない。地球の自転だって、100年に1/1000秒ずつ遅れて
いるんですよ。だから、あらゆるものは無秩序方向に行っているという事で「それはそれで良し!」

良しとしたのですが、その日を境に、親子関係がギクシャクし始めたんです。

娘はそれまでは「お父さん、お父さん、お父さん!」と言って、すぐに飛びついて来たのに、何か遠慮がち。
顔色見る。気配を窺う。近づいて行くと後ずさりする。「これは、まだ気にしとるな」と思って、「あれは、
もう終わった事だからええで。もう赦しているからいいよ。」「(頭を下げて)ごめんなさい」とまた謝る。
「いや、ごめんじゃなくて、もう赦しているからいいよ」と言うのですが「ごめんなさい。」

そんな事が1週間続いたある日、原稿書きしていたらノックの音が出て、娘が入って来て。
どうしたかという、それまでに貰ったお年玉のお金を全部かき集めて来て、「これで赦してください。」
もう、そのシーン、忘れる事ができません。めちゃくちゃ寂しかった。こんなに「赦してる」と言っ
ているのに信じないんです。「もう赦した」と言っているのに、その言葉を信用しないで、自分の気が済む
かどうか軸足を置いているから、本当の意味で、昔のような私との対話を楽しむ事ができないんですね。

自分がした過ちや、過去の一つ一つの罪を思い巡らして、それをじっと見ていたら、どんな人でも元気な
くしますよ。その時、心騒いでいる状態になるんじゃないでしょうか?

心を騒がせてはなりません。神を信じ、またわたしを信じなさい。

「神が納得するような罪の償いを、イエス・キリストが十字架でしてくださったという事を信じなさい。」
自分の気持ちと向き合うのではなく、神がキリストによってしてくださった事に注目して、「わたしを信
じなさい。わたしがあなたのためにした救いのみわざを信じなさい」と伝えてくださっているのです。

聖書では1番恐るべきものは罪です。だけど今の日本人は、罪よりもっと怯え恐れているものがありま
すね。新型コロナウイルス。これは去年の12月に武漢で発生しました。武漢は北京に次いで大学が密集している所
で、武漢市内の大学生だけで100万人以上。中国全土から学びに来ています。中国のお正月/春節は1月
24日-30日ですが、冬休みはもう少し早く始まります。去年12月に新型コロナウイルス肺炎が流行った
後で、この100万人が全国に帰省しました。

それだけでなく、武漢には約400万人の農民工・出稼ぎ労働者がいます。

だから、100万人と400万人で500万人の人たちが、武漢から中国全土にブワッと広がって行った。

これは潜伏期間が 2 週間もあって、潜伏期間中も感染する。人から人への感染も始まっていると言われています。こんな状態の中で、私たちが出来る唯一の、最も有効な手立ては石鹼での手洗いだそうです。ウィルスは油の被膜で守られていますが、これは石鹼の油で溶かす事ができるんです。薬用石鹼じゃなくて普通の石鹼でいい。とにかく石鹼。水洗いじゃなくて石鹼。石鹼買ってください。

手洗いで病気が抑えらる事に最初に気づいた人は、ハンガリー人のドクター・ゼンメルワイス (1818-1865)。170 年くらい前の人です。非常に優秀な人物で、元々は文系・法律家ですが、ウィーン大学にいた時「医学いいなあ」と転向して、ウィーンの大産婦人科病院の部長になり、多くの出産の手伝いをします。

ところで、ウィーンの産科には第 1 病棟と第 2 病棟があるのですが、不思議な事に、第 1 病棟でたくさん人が死ぬんです。170 年前。日本は江戸時代。出産は命がけで、大体 10 人に 1 人は産褥熱(さんじょくねつ)という感染症によって命を落としていました。出産は命がけ。

第 1 病棟は死亡率 13%。100 人いたら 13 人の産婦さんがそのまま死んでしまう。

ところが第 2 病棟は 2%。全然違う。同じ病院・同じ施設・同じ技術・同じ器具。どこが違うのか？

1 つだけ違う事がありました。第 1 病棟は医学生がやっているのですが、第 2 病棟は助産師。

医学生は第 1 病棟で妊婦さんに対応する前に、解剖室で解剖実習をしていたんです。

解剖で死体を触った後、手を洗わないで、そのまま産科病棟に行っていた。

当時、病原菌というものはまだ発見されてません。江戸時代やし。もしかしたら、ここに問題があるんじゃないかと、手洗いを徹底した結果、13%が 2%にドンと低下したんです。

まだ、病原体やウィルスというものは何にもないんですよ。

ないけど、ゼンメルワイスは「これは何か目に見えない死体粒子みたいな粒があって、それが付いたままではないか」という仮説を立て、手洗いを徹底させました。

手洗いでなく、器具から部屋から床から何から全部、徹底的に洗濯・洗浄しました。

0.8%まで下がったんですよ。

彼は確信持つんです。なぜ人が死ぬのか？目に見えない、何か病原体のようなものがあるって、それが感染症を起こしているかもしれない。論文にして、「これから、手洗い励行して行きましょう！」

この論文のために、彼はウィーンの医学界から追放されました。

当時のウィーン医学界は、「産褥熱は体の基礎体液バランスが悪くなって起こり、そして死ぬ」というのが主流/定説で、「治療の度に手を洗うって面倒くさいやんか」というのが反論。「医者忙しいねん」と。それに、人を助ける医者自身が原因で今まで産婦さんが死んで来た、というのを認めるのはプライドが許さなかった。何よりも「神聖な職業の医者の手が汚れている?!神聖な手じゃ！」

それで総スカンを食らって。彼は黙ってられないから、そこから激論が始まるけど、やればやるほど、特に大御所から睨まれてしまったがために、彼は全く干されてしまい、ハンガリーに帰ってしまいます。

「正しい事をすれば、正しい評価が来る」「正しい事を言えば、皆が正しいと認めてくれる」という信念に従って、エビデンスを持って語っているのに、それをやったために居場所がなくなってしまった。

「正しい事をしているのに、なぜこんなにおとしめられなければならないのか?!」

それで神経衰弱になり、おかしい言動だという事で、無理やりウィーン精神病院に入れられるんです。

その時「何をやるんだ！」と暴れたので殴られ、その傷から感染症になって亡くなりました。

ギリシア神話の悲劇みたいだと思いませんか？感染症予防法を発見した人が感染症で亡くなってしまった。「正しい事をしたら、正しく報われるはず・報われるべきだ・報われなければならない」と思ってやったけど、そうならなかった時、耐えられなかったんです。

キリストは全く正しい方でした。1度も罪を犯した事がない。1度も嘘をついた事がない。1度も悪い考えを持った事がない。この正しい方が正しい事を行った時、当時のユダヤの人々から排斥されて行く。その時、彼の精神は崩壊したかというところじゃない。人が何をするのか・どんなものであるのかが全部分かった上で、「わたしは十字架にかかるために、あなた方から去って行くのだから、これは悪い事ではない。だから、あなた方は心を騒がせなくてよい」と言われたんです。

この事から、僕はイエス・キリストの人格は、本当に人となられた神だと思うんですね。

イエス・キリストのように、人の心にあるものを全部読む事ができたら、人を愛する事ができますか？私たちが、思っている事は分からない。これ、大分助かってませんか？皆さん、今どう思って聞いてますか？「なっがいなあ。今日の話…。」「はよ、やめろや」とか。でも「ははは」と笑ってますねん。

人間の奥底にある嫌なものが何か、丸見え状態になった上で、しかも本気で「わたしはあなた方を愛しているよ。」イエスには、翌日何時に十字架にかかるのか、どうなるのか、自分の身の上で起こる事が全部分かっています。自分に降りかかる事が全部見えた上で、踵を返す事なく、目的に向かって真っ直ぐに進んで行くのです。

人間がイエスと同じ能力を持ったら、その人は不幸になると思います。

誰とも関わりを持ちたくないと思うのではないですか？

しかし、「全ての人間の本質を知りながら、尚私たちの罪の赦しを願い、神が得心するような完全な償いの代価を払うために、十字架上で死んでくださった。このイエス・キリストを救い主として信じなさい。」

心騒ぐ理由 2. 死と向き合う時

ヨハネ 14:2 わたしの父の家（これは天国）には住むところがたくさんあります。

そうでなかったら、あなたがたのために場所を用意して行く、と言ったでしょう。

天国には住む所がたくさんある。場所を用意して行くって、どこに行くんですか？天に行くんです。

キリストは十字架で終わるのではなく、十字架で死んだ後、墓に葬られ、3日目に復活し、復活して40日後に、天に用意するために昇って行く。2節は復活と昇天なんです。

私は石垣で、あるクリスチャンの女性とお話ししました。

この方は非常に精神性が高いというか、死という問題について、ずっと考え続けて来たのです。

小学4年生の時熊本にいたそうですが、クラスメートに大の仲良しの女の子がいて、毎日のように遊んでいました。「明日取りに行くから、傘預かってね。」「分かった。」

だけど「明日、傘取りに行くから待ってね」と言っていたのに、時間になっても来ない。

その子は親の船で有明海に貝を取りに行って、転覆して亡くなったんです。「亡くなったよ」って。

「うそやろ…。」命って何だろう？なんと儂いのか。その時から、死とは何なのか、ずっと考え続けて来た。

そうしたら、15歳の時にお母さんが直腸癌。発見が遅れて、高校1年生の時に亡くなった。

お母さんは倫理道徳を前面に掲げる宗教団体に入っていました。だから道徳的・モラル性が高く、色んな人に尽くし、家の事もいっぱいして、ほんとにいいお母さん。

そのお母さんがいよいよ息を引き取る時に、「道德というのは、元気に生きている時には確かに役に立つけど、死の前では何の力もなかったわ。」

では、死を目の前にしても力あるもの・死という現実を乗り越えて行けるものは、一体何なのか？
それで、ちょっとでも死の解決があるかもしれないと思うものには全部、首を突っ込んで行ったそうです。「私、宗教百貨店よ」と。ありとあらゆる宗教に首突っ込んだ。

ある時はお題目を唱える宗教。ご本尊を買って、同じ言葉を言いながら。

でも、これで解決があるならと思って。誘ってくれた人や周りを見ると、すごく確信を持ってやっている。なぜなら、これをやったら商売が上手くいった。事業が成功した。金回りが良くなった。とにかく何でも上手く回る。こんな・あんな・そんないい事があった。

そういうのを聞きながら、「これはご利益宗教で、私が求めているものじゃない。私が求めているのはもっと精神性が高い。死というものに対して解決があるのかどうか。」

だから、求めているものじゃないと思った瞬間に「これ、違う。おしまい。やめます。」

そしたら幹部の方が来て「何を言ってるの！ここから離れたら、あなたは一生、迷いの中で人生を生きる事になるのよ！」その時、「ご利益に惑わされて迷わなくなるよりも、一生迷いながら、真実は何かを追求して行きたいと思います」とはっきり言って。まあ、色んな宗教を渡り歩くけど、全部解決がない。

鈴木大拙（すずき だいせつ/1870-1966/M3-S41）という禅の大家、ご存知ですか？禅宗の偉大な方。

アメリカ人女性と結婚しますね。仏教の布教で、アメリカに宣教に行きました。アメリカ人に仏教の話をするのはもちろん英語ですが、分かったような分からんような、お経みたいな事では駄目。

ロジックで、ちゃんと説得力を持って、積み上げて行く論理で話さなければならない。

そのためには、特にアメリカでは、彼らが信じている・信じている人が多いと言われているイエス・キリストについて学ばなければならない。それを比較する事によって、「聖書はこう言っているが、仏教ではこう言っている」という言い方で説明して行きます。

僕は日本の仏教の本を読んでもチンプンカンプンですが、この方が書いた英語本の日本語翻訳を読んで、「あ、そういう事を言うてはんのや」と。分かり易いですよ。

その中で、「釈迦とイエスはどこが違うか。」「仏教と聖書の福音はどこが違うか。」

仏教で1番大事な事は「考え方」だそうです。こう考えたら楽になる・こう考えたら煩惱から逃れる事ができる・このような見方に立てば解放される、という考え方。つまり哲学です。宗教じゃない。哲学。

彼は言っています。「仏教に救いはない。しかし悟りがある。哲学なので、考え方そのものに価値がある。だから、お釈迦さんが実在していなかったとしても関係ない。お釈迦さんがおられたという事が嘘八百であったとしてもいい。考え方の中に価値があるので、架空の人物だったとしても、考え方が残っているならそれでいい。しかし、福音の場合はそういう訳にはいかない。イエスが架空の人物だったとか、イエスは十字架にかからなかったとか、イエスは3日目に復活しなかったとかになれば、聖書の福音は崩壊する。」

すごく正しいと思って。教えられますわ。考え方ではなくて、事実立脚しているのです。

彼女には義理のお姉さんがいます。その方がアメリカにいる時にクリスチャンになって、そのまま聖書学校に行って帰国するのですが、なぜ聖書学校に行ったかというのと、このお義姉さんも、死についてずっと考えていたのです。小学校5年生の時、全20数巻の世界偉人伝記を読破しました。

私も子供の時、世界偉人伝記を読破したけど漫画でした。漫画版もあるけど字の本。痔じゃなくて字。

シリーズで、キュリー夫人とかアレキサンダーとか（何でアレキサンダーが出て来るのか分からへんけど）、色んな人が出て来て、その中にキリストも入っていた。

全部読んで 1 つ分かった事は、全ての偉人は本人が死んだ段階で終わるのに、キリストは死んだところから物語が始まっている。その偉人伝シリーズのキリストの話には、ちゃんと復活が書いてある！

そんな本があるんですね。読んでみたいなあ。

死んで終わりではない。3 日目に死を滅ぼしてよみがえられた方。歴史的事実に立脚しているキリスト。彼女は数年前から YouTube を見るようになり、まず聖書の言葉がいかに信頼できるのかを確認した上で、「この方は神だ。神ならよみがえる事ができないはずがない。」

今読んでいるヨハネの福音書のヨハネは、キリストが十字架にかかっている最中に彼と会話した弟子であり、よみがえったキリストを目撃した人物です。彼らの目撃証言によって、それを知る事ができるんですね。キリストは復活しました。なので、キリストに繋がる者は、死んで終わりではない。

魂は天国に行きますが、肉体もやがてキリストが来られる時に復活する。そう書いてあるんですね。

心騒ぐ理由 3. ヨハネ 14:3 わたしが行って、あなたがたに場所を用意したら、また来て、あなたがたをわたしのもとの迎えます。わたしがいるところに、あなたがたもいるようにするためです。

わたしが行って。どこに行くのかというと天国です。

また来て。これは再臨というより携拳と言った方がいいでしょう。キリストは世の終わりにまた来ます。また来て、あなたがたをわたしのもとの迎えます。わたしがいるところに、あなたがたもいるようにするためです。ここには「キリストがまた来て、クリスチャンを一挙に天に携え上げる」という携拳の約束があるんです。

今年の大河ドラマは明智光秀。『麒麟がくる』。なぜか知らないけど、私、見る気がしないんですよ。多分見出したらいいんでしょうけど。その前的大河は、もっと見る気がしなかった。『いだてん』。好きな方、ごめんなさいね。僕は見てない。視聴率は非常に低かったけど、すごく熱演だったそうです。

主人公は金栗四三（かなくり しそう/1891-1983/M24-S58）。「日本マラソンの父」と言われている人物で、国内で、マラソン世界記録を 20 分以上短縮するという偉業をやったのけました。その時世界最速の記録を、いきなり 20 分以上も短縮するんですよ。ぶっちぎり金メダル間違いなし！という事で、1912 年にストックホルム・オリンピック大会に行くのですが、走っている最中に日射病になって、倒れ込んで行方不明。いつまで経っても帰って来ないので、結局行方不明扱いで大会を終えるんですね。

金メダル間違いなし！という重責を持って、しかも途中棄権みたいな形で終わった。その悔しさをバネに、彼は日本最初の高地トレーニングを取り入れて、後進育成に懸けて行きました。毎年正月の箱根駅伝を始めたのは金栗さんです。

55 年後の 1967 年、ストックホルム大会委員会がオリンピック 55 年祭を行った時、かつて参加した選手という事で、金栗さんもお招きを受けました。式典が終わった後、「折角だから、マラソンコースを歩いてみませんか？」55 年前リタイアしたコースを歩きながら「懐かしいなあ。」

そして、スタジアムに入ったら超大入り満員。みんなスタンディングオーバーション。

場内アナウンスが「ただ今、金栗選手が入って参りました。」

そのままゴールテープを切ったら、「55 年 2 時間〇分〇秒」と。

そして、「ただいまをもちまして、第5回ストックホルム大会全日程を終了します」と言ってくれた。めっちゃくちゃ嬉しかった。最後の1人のランナーがゴールして、初めてこの大会は完了したと。

なぜ僕が感動したかという、聖書には「キリストは教会が完成したら来る」と書いてあるんですよ。教会はクリスチャンの共同体です。最後の1人が教会に加わったら、イエス・キリストを信じたら、その瞬間に教会時代が終わって、クリスチャンは皆天に引き上げられて、次の時代に入るといえるのです。

私は、今生きている時代は終末時代だと確信しています。キリストがいつ来られても不思議ではない時代。その時代に神様が皆さんに語っているのは、もしかしたら、皆さんが最後の1人かもしれない。

そう思うと、話をする時ワクワクするのです。

わたしが行って、あなたがたに場所を用意したら、また来て、あなたがたをわたしのもとに迎えます。また来てくださる方。そして、信じた者を一人残らずキリストのもとに迎えてくださる方。

ヨハネ 14:6 イエスは彼に言われた。「わたしが道であり、真理であり、いのちなのです。わたしを通してでなければ、だれも父のみもとに行くことはできません。」

この父は私たちをお造りになった創造主なる神様。創造主なる神様のもとに帰る道は1つだけ。その道はイエス・キリストです。

バイオリンをやっている音学生が、カーネギーホールで滅多に聞けないコンサートがあるという事で、田舎からニューヨークに出て来たのですが、ニューヨークはメチャでかい。僕も3回行きました。ティファニーの前でドーナツ食いましたよ。「なにやっとなねん」という感じ。911の前。

ストリートとアベニューが碁盤の目になっているけど、田舎から出て来たら分からない。コンサート時間が近づいているのに中々見つからない。それでポリスに「カーネギーホール、どう行ったらいいですか？もう時間が迫っているんです。」そしたら「練習だよ。1に練習2に練習。3.4がなくて5に練習。練習すれば君だって、いつかカーネギーホールに立つ事ができるだろう。」
「そんな冗談、言ってるヒマないんです。開演時間近いんです。何とかしてください。」
「この道まっすぐ行ったら行けるよ。分からないなら俺について来い！」この場合、彼が道ですよ。

道は英語で Way。道路の道という意味だけでなく、「方法」の意味もありますね。

罪だらけの人間が父に受け入れられる方法は、イエス・キリストが私の代わりに罪の償いをしてくださった、このキリストの償いを自分のものとして受け入れる以外にありません。

「わたしを通してでなければ、だれも父のみもとに行くことはできません」という事は、私たちがキリストを通して行くなれば、どんな人でも誰でも、父のみもとに行く事ができるのです。

果たして、神様は私たちを歓迎してくださるのでしょうか？して下さいますとも。

キリストが招いてくださっているのです。

僕は山田洋次（やまだ ようじ/1931-）監督が好きで、『フーテンの寅さん』の最後の作品、ご覧になりましたか？阪神大震災のボランティアやっているんですよ。「フーテンの寅がボランティアしとる！」って、これにはおったまげました。今までにはないような。これが最後の作品になりました。

因みに、渥美清（あつみ きよし/1928-1996/S3-H8）さんの奥さんはクリスチャンで、お葬式（召天記念式）

は教会でやりました。彼はプライバシーを非常に大切に、自宅には映画関係者を誰も呼ばなかった。だから、彼の信仰の事は深く分からないのですが、そういう方でした。

山田さんの有名な作品『幸福（しあわせ）の黄色いハンカチ』（1977/S52）の主人公は高倉健（たかくら けん/1936-2014/S6-H26）。彼の本名は剛一。どう思います？それから「なんか似てるかな」と妄想が始まって。

高倉健（勇作）が夕張炭鉱で働いていたのですが、ヤクザに絡まれ、誤って死なせてしまいました。彼には奥さんがいるけど、まだ若いので、「こんな前科のついた奴と一緒にいたらあかん。別れてくれ！」と無理やり離婚状にハンコ押させ、自分は刑務所に入って服役する。

出所した時、チャライカップルと出会います。武田鉄矢（たけだ てつや）と桃井（ももい）かおり。劇での名前忘れました。もう、めっちゃチャライ。夕張まで車に乗って行ったらいいと、3人のドタバタ道中が始まります。

ある時、高倉健が鯉のぼりをもものすごく感慨深そうに見ているので「どうしたんですか？」と聞いたら、「実は、刑務所を出る時に葉書を1枚出した。『もし今でも再婚せずに待っていてくれたら、鯉のぼりの旗竿に、黄色いハンカチを結び付けておいてくれ。もし付いてなかったら、君の今の生活を壊す事はしない。二度とあなたの前に姿を現さないから』と。」

どんどん家に近づいて行くのですが、途中から「やっぱりやめだ！」と言い出すんです。「やっぱり、そんな虫の良い話があるか！引き返してくれ！」
そしたら、今までチャラかった桃井かおりが（もう名言ですよ）「ダメ元っちゅう事があるでしょうがっ！ダメ元っちゅう事が！」べらんめえ調で。
「見もせんうちに、手前で諦めてどうすんの！ダメで元々っていう事があるでしょう！」

高倉健は、もう窓を見ていられない。うつむいて、ずっと自動車の床を見ている。
遂に家の近くまで来た時「あれっ?!」
黄色いハンカチ…。1枚じゃない。何十枚もバタバタッ！バタバタバタッ！「完」。涙、だーっ！
ハワイの帰りに飛行機で見て、1人で号泣。彼、嬉しかったでしょうねえ。

神が私を歓迎しておられるという印は十字架です。
十字架こそは、神の愛の旗がはためいている印です。
もし神の愛が分からなくなったら、十字架につけられたイエス・キリストの事を考えてください。

キリストは十字架の上であなたの赦しを請い願ひ、そして、同じ時に十字架にかかっている犯罪人に向かって、「誰でも信じる者はわたしと共にパラダイスにいる」と言ったんです。

キリストは、昨日も今日もいつまでも変わらない方です。
是非、このキリストを今日こそ信じて、そして永遠のいのちをもらってください。心からお勧めします。

~~~~~

- \* 動画は YouTube で「[HCA 東住吉キリスト集会](#)」
- \* ラジオ番組「[聖書と福音](#)」（約14分）も是非どうぞ。YouTube もあります。
- \* YouTube「[ごうちゃんねる](#)」（約10分）も是非見てください。

動画筆記：Rumi

